

優 秀 賞

「 上を向いて歩こう 」

公共学科 4 年 岩本 哲

夜遅くの駅前、私はアルバイトを終え、改札の方向へ向かっていた。そこでその体験は起きた。駅前にはスロープがあり、その坂に困っている車いすに乗った女性の方がいた。夜遅くで、終電も近くなっていたため私は「押しましょうか？」と声をかけた。すると女性の方は「郵便ポストを探しているんです」とその女性は言った。その周辺に郵便ポストがあるのかどうか私はわからなかったので近くの駅員さんに聞き、郵便ポストまで車いすを押すことにした。すると女性は「医療従事者の方ですか？」「医療学生の方ですか？」と声をかけてきた。私はどちらにも当てはまらないので「いいえ、違います」と返した。するとその女性は「そうなんですね、私は視力も悪く普段から困ることが多いけど、声をかけてくれる人がいないので、医療関係の方かと思いました」と言った。この言葉に私はハッとさせられた。自分自身普段から思いやりを持って生活しているつもりだった。困っていると見て取れる人にはなるべく声をかけるようには生活しているつもりだった。でも心のどこかでこれくらいなら大丈夫かな、といった自分の中のものさしで勝手にはかっただけなのだと気づいた。自分自身が思っているよりもその手を求めている人はたくさんいるのだとこの体験から感じた。

いついかなる時もデジタルにのめり込んでしまう、ながらスマホなどは現代社会ならではの問題であると思う。スマホではなく顔を上げて周りを見てみると、その手を求めている人はたくさんいるのだとその女性は私に教えてくれた。